
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

【Nコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきつと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

プロローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまうですが暖かい目で見守ってくださるとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの○○じゃないなどといったものがあると思いますですがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします（汗

それでもよければぜひともご覧ください

プロローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もうらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポの自分が経験するとは思ひもしなかった、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してP S 3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て（？）から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさっきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思っれていても実際に体に怪我などをしてるわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f aを始める↓リリウムたんマジ可愛いよ↓テレビからなぞの光が！↓知らない天井だ↓俺、若返りました↑今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLETEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

(なんか開いちゃったよ!)

そしておそろおそろ入っていくとそこにあったのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言うため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

プロローグ的な（後書き）

最初から駄文ですいません；；

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗）

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそこら辺はご了承ください

第1話

第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音をしたほうをみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主とかいてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に來たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末に取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこっちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじゃったかと思ったぜ」
ガハハッと相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんかなかったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かったただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

（どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言ってきた
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容をみた

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえませんが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安でな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがコジマなんちゃらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？でてきたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はあるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7／8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらおう」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカッと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に NIOH 左腕武装に WLO2R—SPECTER というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうか・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなじゃ最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中 of グレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWLO2R-SPEC TER をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

(後はこいつを破壊すれば終わりか・・・)

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

(これで終わりか・・・)

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた
(俺が殺した・・・この手で俺が)

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWLO2R-SPEC TER でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにはしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急い胃の中のもののがこみ上げてきて嘔吐してしまった
(これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを
そういや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（㊦㊦、）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたか・・・なんというか

第2話

第2話

あの初（？）の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

（また、依頼か）

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

（伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？）

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「・・・」

「ん？どうした」

「・・・っああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらしらないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からpipipiと鳴るとレイジは端末を取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見つめる

（なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みたいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するでしょう）

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところらがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

（この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか？）

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな？」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

（まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな？

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな？）

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないような気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない

こちらこそなんか怒っているみたいなの印象を与えてしまったようだすまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をくらしい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちらから始める」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

（二回目の戦闘だって言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな）

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思ひあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

（なっ！まさかネクストだと！？？どうしてこんなところに！？）

と思っていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思ってお前らの情報を売って安全を保障することにしてもらったんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになっているからな、まあ運が悪かったと思ってあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言うと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリートが葬ってやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑って言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送った

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」
アイマードコフ・ネクスト

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてまともに殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしなくていたするとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」
それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバーボードブーストをふかし去っていくのを見て敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

という右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言う

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、アンジエてめえらはいつとさっき逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時に04-MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソーでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そういうと彼は右手から04-MARVEをすてて左手の02-D RAGONS LAYERだけとなった

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そういいこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにPファイナルアーマーAなどが
あっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に
硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ
してOBをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02-DRAGONS
LAYERを振るった

だが02-DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、
なぜならば02-DRAGONS LAYERはほかのレーザーブレ
ードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握でき
てない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。
だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレ
イジはとまらずに

「おおおおおおおおおおお！！」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOSHを撃ち込むと

「ガアアああアアああアああ！！」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しん
でいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOSHを3回撃ち込むと
赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

（これでもう戦うための武装は無いな、だがレイヴンが逃げることに

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行うかのように立っていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになってまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく
のはもっと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると
アンジェが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな
と加えて言った

それを聞いたベルリオーズは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放
したのであった

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジェ、4の主人公はこんなじゃねえ！
と思われるかも知れませんがそこら辺はつつこまないでくれるとあ
りがたいです（・▽・；）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

えゝ前回の話でネクストに勝ってますがそこら辺はご都合主義という形で保管してもらえとうれしいです（汗

そして今回も微妙なですが是非読んでください

第3話

第3話

「知らない天井だ・・・」

と言うと最初に目に入ったのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思っていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通ってきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考えると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がっているのを見る

（まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ” ったことになったのか！？）

などと考えていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやっと目が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あんたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」

（もし、そうならこいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオーズ”

だ。おぼえておいてくれ」

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言ったほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言ってたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言ったんだ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言っていたように他人からみて無意味な行為など言われんじゃないのか？」

「そうかもしれないな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思ってな、見てみたくなったのさ」

なにをとは言わなかったがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういえば外の状況はどうなっているんだ？」

「ああ、それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わった」

とベルリオーズの言葉を扉から入ってきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たった一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言ってるんだ？すでに一週間と数日はたっているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠ってたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まったくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦った後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠っている間に企業側が圧倒的な勝利を収めて戦争は終わった。そして今日お前が目を覚ましたというわけだ。まったくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言う女性の言葉に対してベルリオーズは「よい戦士だと思ってもな、興味がわいたんだ。そういう君もまっ

たく興味がないわけではないだろう？」

そう言われると女性「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「そういえば彼女の名を言ってなかったな、彼女は「アンジェだ」・

・それとまだ、お前の名前を聞いていなかったな」

「ああ、言うのを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

と言うとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさっきお前にチャンスをやると言ったことについてだが、AMSを移植してもら方がいいな？」

と聞くとレイジは

「どのみちそうでもしなきゃこの先、戦場では生きていけないんだろう？移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑って返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてきてくれ」

と言うとベルリオーズが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなっていた

そしてレイジは助けてもらった恩を返すために2年程レイレナード社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下という微妙なものである

（どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん？でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言ってられないか）

と思い今日もまたシュミレーターでネクストを動かし、少し休憩している

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」とアンジェが言ってきたのだ

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と自嘲気味に返した

「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びシュミレーターに乗り込んだ

アンジェ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになったレイジのシュミレーターの成績を見ている

正直、彼は彼女が思っているよりも成長の度合いが早かった。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほうだったな、なのにこれだけの成長速度・・・いや、むしろ早すぎるぐらいか）

と思っているとレイジがシュミレーターからでてきて近くのいすに座った

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い彼が座っているほうに歩いていき

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」と言うレイジは

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と付け加えて自嘲気味に返してきた
「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

と彼女はシュミレーターに指をさしながらレイジに言う

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言いは再びシュミレーターのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

(ふっ、これまでの力、試させる手もらうぞ)

と思いもう一台のシュミレーターのほうに歩き始めた

side out

シュミレーター内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オルレアの武装は左腕武装に01-HITMAN 右背武装にSULTAN 肩に09-Flicker そしてなによりも彼女の代名詞と言っているほどの特徴のある右腕武装“07-MONLIGHT”である彼女の振るう剣は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言う名がふさわしく思えるものである

それに対してアノーニモの武装は右腕武装に03-MOTORCOBRA 左腕武装に04-MARVE 左背武装にTRESOR というなんとも特徴の無いアセンになっている

そして二人のコクピットに開始の合図がでる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09-Flickerを撃つと同時に07-MONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとっさに左にQBでよけるが07-MONLIGHTが少しかすりPAをこっそりと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を

立て直し左手の04－MARVEをまだこちらに向ききっていない
アンジェに対して（もらった！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのようにQBで難なく避けたのだ
だがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジェに張り付くように移動し、右手の03－MOTORCOBRAと左手の04－MARVEを撃つ

それに対してアンジェも左手の01－HITMANで撃ち返しながら右手の07－MOONLIGHTで切り裂こうとどんどん近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いに入らぬようにQBを使い均衡を保っていた

しかしすぐさまその均衡をやぶったのはアンジェであった、アンジェはレイジの一瞬の隙をみて二段QBで一気に詰め寄り右手の07－MOONLIGHTを振るった・・・が完全には切り裂いていなかったレイジの突発的な二連QBでなんとか致命傷を避けたのだ

（ほう、今のは完全に決まったとおもったんだがな、にしてもなかなか当ててくるじゃないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）

そう思いながらアンジェは攻撃の手を休めずにいた。そしてレイジは

アーマーポイント

（危なかった、何とか致命傷にはならなかったがAPとPAをこっそり持ってかれたな、にしてもさっきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないここは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESORに切り替えアンジェに向かいQBをすると

アンジェは好機と考えレイジに向かい07－MOONLIGHTで切りかかった

するとレイジは07－MOONLIGHTがあたる直前でTRESORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07－MOONLIGHTがほぼ直撃してしまったのだ、するとアノーニモのAPは0となりLOSEと言う文字がレイジのシュミレーターに浮かび上がった

(やっぱりかー！)

と思いレイジはシュミレーターをでた

アンジェ side

(最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ)

と心の中で言う彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた

(やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よい戦士になりそうだ)

そう思いシュミレーターからでた

side out

アンジェがシュミレーターからでるとレイジは

「やっぱりアンジェは強いな、勝てんな」

「ふっ、お前も予想より強くなったじゃないか」と珍しくレイジのことを褒めたのだ

「そうか、ありがとう。だが次は勝てるようになってやるさ」

「よく言う、簡単には勝たせやしないさ」

そう言うアンジェはシュミレータールームを去っていく
そして扉をでると

「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあったのか？」

と聞くベルリオーズに対して

「そうか？まあ、あいつはお前の言ったとおり、よい戦士になるかもな」

そう言うとき彼女は廊下を歩いていった

するとベルリオーズは彼女の言葉に対して「ほう」と言うときシュミレータールームに入っていた

そしてこのあとレイジはリンクスNo. 29をもらい

シュミレーターでベルリオーズにぼこぼこにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジエはこんなじゃねえ！と思われ
ますよね・・・orz

あとリンクスNo. 29ですが実際はAC4開始前に倒されている
らしいんですがそこらは少し独自設定的なものを入れさせてもら
いました

次も頑張って書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（前書き）

えゝ、今回も無駄に長いし駄文です

いろいろとキャラが安定してなく読みづらいと思いますが、すみません（汗

そして、IS出てこないやん！と思われる方もいらっしゃると思いますが

ISの世界に転生するのはもう少し先になりました

一応今週中にはISの世界にいくつもりでありますのでどうか温かい目で見守ってくださいm（―――；）m

第4話

第4話

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

と言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかありえないと思っていたのに自分が今この場にること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うぐらいだ、最初のミッションであの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わずに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまったていると考えると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言っていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになっており、しかも事情があったり、悪に利用されて戦っている人達や事情を知った主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになっていく。

だが実際の戦場と言うものはそんなものではない。戦うものにはそれぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのである

る。誰かが正義と知っていることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場^{こち}では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例えば相手が家族を人質にとられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考えている間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考えることをやめて帰還の準備をした。

side out

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのコロニーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持っている少女がいた、見ていると今にも転びそうでもとても危なっかしい様子である。

（ふむ、手伝ってやるべきか？だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ）

そう考えていると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当たってしまったのだ。

すると少女は

「ご、ごめんなさい！」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！
ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」
と、さらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけで許
してもらえろと思ってるのか？」

と他の男が言いそれに続きさっきの男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今
すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

そうは言っても子供が10万などという大金を持っているはずがな
く払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえ」

と言いながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちよっと、お話しないとね」

と言うと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行こうと
する。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりである

まあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることは
しないだろう

（なんつうか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにする
とは思わなかったが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほ
ど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになった・・・）
そう言う男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいでも大変です。けどほかの子のみんなのためにいっしょうけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしまいました、やっぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝ってもらえばよかったなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそろおそろ男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一歩背が高い人の靴にかかってしまっているのを見てあわてて

「ご、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」
ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけで許してもらえんと思ってるのか？」

と二番目に背が高い男の人が言ってきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさっきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われなくてもそんな大金は持っています。ですが男の人は

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに言ってきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰ってもらってくることもなくてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえ」

と言うと私のことを気持ち悪い目でじっと見てきます。すると

「じゃあ悪い子にはちよっと、お話ししないとね」

と言うとわたしの腕をつかみどこかに連れて行くこうとします。わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引きずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めますが周りの人たちはみんなこちらをチラッとみるとすぐにどこかに行ってしまう。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だと思うと

「おい、下衆どもその手をさっさと放してとっと消えうせろ」

と黒い髪に黒いコートを羽織った男の人が言いました。するとわたしをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすっこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さっきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」

と言うと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむかって放り投げました。すると

「さっき払えなかったから利子がついて合計100万払えば許してやるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が

「そうか、貴様は自分が偉いとか思ってるのか？やれやれ、とうとう脳みそまでもカビたか・・・」

と言うとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かって殴りかかりました。わたしは思わず目をつぶってしまい。鈍い音がしておそろるおそろる目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必死に押さえてうずくまっています。すると二番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！てえだしてただですむと思
ってんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人
は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に
手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスカ、笑わせる。俺もリンクスだがそいつ
のような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスNO.
は29なんだがな」

そう言うのと二番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言うとうずくまってる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで
遠くに行ってしまった。そして黒い人はこちらのほうを向くと
近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました思わ
ず黒い人に抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は
「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそっと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ
黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

s i d e o u t

あのあと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さっきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。そういやお譲ちゃん、買い物をしてたみたいだが大丈夫か？」

「あ！どうしよう・・・」と言うと少女は俯き肩を沈める

「ふむ、買うものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビックリし

「ふえっ？」と素っ頓狂な声を発してしまった。そして

「はい、一応憶えています・・・」そう答えると

「そうか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買ってやるよ」

「で、でも助けてもらったうえにそこまでしてもらうのは・・・」
と、ためらう少女

「だけどもた親御さんにお金をもらいにいくのも大変じゃないか？」

「あ、えっと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんです・・・」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言うのを聞くと

（やってしまった・・・あまりにもデリカシーの無いことをしてしまった・・・）

そう思い、レイジはどうにかしようと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するということでもいいね」と言うが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに対して少女の頬を軽く引っ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあった見ず知らずの人を信用しろと言うのなんだが、もうちょっと年上の人を頼っていいんじゃないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく　こくんと頷くとレイジは頬から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言い笑った。すると少女は手に軽く力をいれ

「あ、あの！わたしは、リ、リリウムといいます！お、お兄さんの名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そういや、言ってなかったな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな」

そう言うとき席を立ちリリウムという少女と買い物をしてかけた

そして買い物の途中

「そういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことが・・・」

「怖いといえば怖いかな・・・けど、もう慣れてきてしまったかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だって頑張ればみつけれらんじゃ」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろうな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな目をしてる）とリリウムが思っている

「ほら、こんなくらい話はやめよう！子供には関係ない話だ。」

と言いつつリリウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛しているな」と言う

「孤児院のお姉ちゃんがいつも丁寧にとかしたりしてくれるんです！」と嬉しげに話す。するとリリウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは

「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思って」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですけど・・・」とごによごによと答えるリリウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買ってやる」

「い、いえ大丈夫です！そこまでしてもらうのは」といつつもやはり欲しそうに少し目を輝かせている

「遠慮するな、リリウムも女の子だ小さいころから髪留めの一つや二つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買いリリウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わりリリウムを孤児院に送っていくと去り際に「縁があったらまた会おう」と言いレイジも帰ることにした

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた

（ベルリオーズに呼ばれたが、どうしたんだ？二年間だけといったがそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・）

と考えているとレイジが待っていた部屋の扉が開きベルリオーズが入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか？」

第4話（後書き）

今回もびみようでした・・・

そしてリリウム登場させてみました、正直、無くてもいいんじゃない？って感じですが作者があまりにもリリウムたんと、きゃっきやつ、うふふって感じのを書きたいがため頭の中の妄想を垂れ流しました（ Δ_1 ；；；

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはISの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願いしますm（
|；）m

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000PVと10000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださったり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはISの世界に入ることができそうです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

第5話

約三ヶ月前、G Aにコロニアアナトリアから傭兵が売り込まれたそう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡ったのだ。

そして約一週間前に、G Aグループ内である事件が発生することになる。G A Eが秘密裏にアクアビットと提携しG Aグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかったG AグループはG A Eに対して、アナトリアの傭兵に粛清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器もろとも破壊したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思ったのだ。」
そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう？俺はあんたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもらう・・・すまない。」

レイジは唇を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオーズに告げる。
だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならそう言うと思ってたぞ」

と言うベルリオーズの言葉を聞き

「なっ、あんたは俺が断ることわかっていたのか？」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言い静かに笑うと部屋を出て行った

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしっかりとみとめてやる」

と誰もいない部屋で言った

ベルリオーズside

やはりレイジは、自身のことを過小評価しすぎだな、己を過小評価しすぎると自滅してしまうからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふっ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数ヵ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシュア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上のコジマ汚染はいつきに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カレード”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり
「了解」そう短く応えたとレイジは、ヴァンガード・オーバーボード・ブーストVOBがネクストにちゃんと接続されているかを確認しOBのスイッチを入れるすると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しいつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。

(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイレナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだのは全く思っていない、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすというにしか考えていなかった。だが逆に、なにもしなすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではと思ひ、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思っているも本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることは全く別の行動をとる体に対して思わず笑ってしまう。

（ふっ、そうだったな・・・俺はどんなに醜くても生きようとする奴だったな。なら足掻いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やっこの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはっ！ははっ、やっぱりこうなる運命なのかね・・・まったく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言うレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかったか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらくが生きているだろ。まあ、こちらには都合がいい。さて、あの人がよい戦士と認めた人物だ、接触を試してみるか・・・）

そう思うと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思っているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どっかで見たことある顔だな？どこだったかな・・・そしてどことなく雰囲気がいっぴきにしているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺ってもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことある奴だろ？」

「なんだ知っていたのか」

（やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな）

「いや、思い出したただけだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろ？」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話？俺なんかにか？」

「ああ、あの人が高く評価していたから気になってな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんなたいそうな人間じゃないさ」

（ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな）

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わって戦況が変化するほどのものだったら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ？」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言うのは少し違うのではないか？あの人から聞いたぞ、あなたが断ったのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言ったらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであろうと、わかっているもそれは自身の贖罪だと思ひ受け入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとっていたら、ベルリオーズやアンジェ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまった。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かった。“答え”を見届けると言っても他人から見ればしょせんは自己満足の贖罪なのである。だが目の前の男はそ

のことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言ってるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとってどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される覚えはないんだがな、受け取っておこう。」

(ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない)

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入っていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやろうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめています。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にしかすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えないか？」

「ふっ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

「素晴らしい不適に笑ってみせる

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カレードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらうがいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになった人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたったら面倒なことになるんじゃないか？」

やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立ってもらおう。まあ、死んだことになってるから名前などは変えてもらうことになるがな」

「わかった」

「では、新たな名前を決めてくれ。そうすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉をいれてみようか、ならば・・・）

「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふっ、ずいぶんという意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジャックとよんでくれ」

「そうか、よろしく頼む。ジャック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORCA旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。
m (| ;) m

第6話（前書き）

アンケートにご協力の方本当にありがとうございます。

アンケートのほうは、明日の昼の12時までとなっておりますので
ぜひ他の方もご協力おねがいします。

そして今回も時間をそれなりにすすめた感じがします。

なので結構無理やりな点がいくつかあると思いますがそこは見てみ
ぬふりをお願いします（汗

第6話

第6話

レイジがジョン・ドウと名乗りORCAに入ってから約2年がたつ

新人リンクスside

俺は今、企業連からのラインアーク襲撃の依頼を受けた。

力をちらつかせた交渉は、我々の本意ではない、ねえっうん、絶対嘘だな。でもまあこれをやらなきゃカラードに登録されないだろうしな。

「おい、ミッション開始だ。下らんことを考えてないでさっさと行け。」

「了解」

いま通信で厳しいことを言ってきたこのバブ「貴様、ミッションが終わったr」ゲフンゲフン！この綺麗なお姉さんは、俺のオペレーターをしてくれるセレン・ヘイズだ。

俺は約一年前に拾われてから、独立傭兵のリンクスとなるべく鍛えられてきた。

そして今回、カラードに正式に登録するために企業連のこの依頼をこなすわけだ。

ちなみに今、俺が乗っているネクストは旧レイレナードの03-A ALIYAHをベースにしたのをストレイドという名でセレンさんが用意してくれた。

どうやって手に入れたのか気になり一度、聞いてみたんだが：

「なに、ちょっと話をしたら譲ってくれたぞ。」

とかなんとか言っていた。しかも話し相手は顔を真っ青にしてたら

しいとのことだ、恐ろしい…

「企業のネクストだと？」

「畜生、こんなときに限って！」

（さて、さっさと終わらせるか）

そう思うと次々と守備部隊をに倒していく

「目標、残り約半数」とセレンから通信が入る

「クソッ、効いているのか？」

「プライバル・アーマーだ、まずはプライバル・アーマーを減衰させるんだ！」

そう言いながら必死に抵抗してくる相手をさらに倒していく

「目標、残りわずかだ」とまた通信が入る

「通常兵器では太刀打ちできん！」

「ノーマルはまだなのか！ノーマルは！」

相手の言葉を気にせずに残りの敵を排除していく、最後の敵を排除したかと思うと

「敵、増援を確認。ノーマル部隊だ、油断だけはするなよ」と通信が入った

（めんどくさ！さっさと終わらせよう）

そう思い、増援できたノーマル部隊を殲滅していき。すべて倒すと

「よくやったな、ほぼ完璧だ…とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな。」

とミッション終了の通信が入った

（やっと終わったか…あれ？でもこのまま戻ってもさっきのことで俺、セレンさんに殺されるんじゃない？でも、ミッションはほぼ完璧だったから見逃してくれるかな…無理だな、あきらめよう。）
そう思い帰還を始めるのであった。

side out

そして、ラインアーク襲撃のあとカロードに新たなリンクスが登録される。そう…このあと次第にカロード全体を騒がせることになる後の首輪付きである。

そしてラインアーク襲撃から2ヶ月ほどたつころ、ジョン・ドウ
スピリット・オブ・マザー・ウィル
(レイジ)はカブラカン撃破の依頼を断り、SOMの撃破の依頼を受けることになった。

(オーメルからの依頼か、まあ俺は構わんが…メルツェルめ、何を考えている?)

そう思いながらもオーメル仲介人の説明を受ける

(VOBの使用か、また小細工して爆発されそうだな…まあ、いいか)

などと考えている間に仲介人の説明も終わっていた。

(それにしても、あの仲介人の話し方、イラッとするな…俺だけか?)

とくだらないことを考えながらも依頼を遂行するべく準備をしていた

そして数時間後、ミッション開始時間

「では、リンクス。ミッションを開始してください。」

「了解」そう言いレイジはOBを起動する。すると次第に加速していきVOBが点火し、いっきに超スピードになる。

(どうやらVOBに異常はないみたいだな)

そう思いながらも迫り来るSOMの砲撃をかわしながら彼我の距離をつめていく

「VOB使用時間、限界近いです。通常戦闘の準備をお願いします。」

そう通信がはいり、少しして

「VOB使用限界です。パージします。では御武運を」

そう言い通信が一旦、切れると同時に

「どりゃああああああ」

と場違いな声がしたほうを見ると、ギルドーザーが突っ込んできたのだ

「場をわきまえない解体家か、悪いがお前に構っている暇はないんでな」

そう言うときレイジはOBをふかしSOMの懐に入り、次々に迫り来るミサイルをQBをうまく使いかわしていき右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで発射口を潰していく

「ふむ、ミサイルの発射口はすべて潰したか、なら次はあの馬鹿でかい砲台か」

そう呟いていると

「どすこおおおおい」

とまたも場違いな声がする

「しつこい奴だ、まあミサイルの発射口はすべて潰したからな…いいだろう、相手になってやる」

そう言い右背をEC-0300に左背をDEARBORN03に切り替えギルドーザーに対して撃ち、QBを使い死角へと回り込むと03-MOTORCOBRAと051ANNRでひたすらに撃ち続ける。

そしてギルドーザーは両手のGAN01-SS-WDを当てようと突っ込むが難なく回避され銃弾の雨を浴びせられさらにボロボロになる。

「めんどくさくなってきたな…もう終わらせるか。」

そう言うとき両手の03-MOTORCOBRAと051ANNRを捨てて格納してあるレーザーブレードのEB-0600で死角

から確実にコアを切りつける。するとギルドーザーは

「やっぱりかああああ！」

と叫び声が聞こえると沈黙した。

「さて、予定より時間をかけてしまったな。さっさと砲台を壊しに行くか」

そう言い、砲台に近づき一閃、二閃と切り裂き、もう一つの砲台も同じように切り裂き破壊するとSOMが崩壊し始める

「総員、地上装備！総員退避！退避しろ！マザーウィルが崩壊するぞ！」

そうSOMの隊員が言うのを聞き、OBをふかし爆発に巻き込まれないように離脱する。そして安全圏まで離脱すると

「こちらネームレス・ワンだ、SOMを撃破した。」

「マザーウィルの撃破確認しました。速やかに帰還してください、お疲れ様です。」

そう聞くと通信を切り帰還する。

そしてほぼ同時刻、レイジが断ったもう一方のカブラカンを撃破するミッションは首輪付きがこなしていたのであった

カラードside

「あの無名のリンクスが、あのマザーウィルを…？」

「はい、間違いありません、ローディー様、カラードは情報の精度を確認しています」

「・・・」

「仮にもリンクス、本来そういうものだろう」

「だいいがな…それよりアルテリア襲撃犯はどうなっている？堂々とクレイドルの要諦を狙われ、すべて不明、全く打つ手無しなど、管理者の存在意義が問われるだろう」

「その通りだ、ルールを守れないのであれば、静かに退場してもらう他はない。それがラインアークであれ…レイレナードあたりの亡霊であれ…」

side out

リリウムside

私は今回のマザーウィルが撃破されたことに興味を持っていました。いえ、マザーウィルが撃破されたほうではなくて、撃破したリンクスについて興味をもっていました。もしかしたらあの人ではないかと、そしてマザーウィルを撃破したリンクスは、あの人が死んだと言われてから数日の内に急にカラードに正式に登録をされ、その内容はあまりにも自然すぎるもので、私は、あの人には実はいないんじゃないかと…そして今回のことでよりいっそう真実に近づけたと思いました。

side out

ORCA side

「カブラカンをおとすか。どうして、なかなかいるものだな」

「ああ…モノによつては、首輪をはずそうと思う」

「ハリのように、か？それもいいがなメルツェル」

「案ずるなよ、ジュリアス」

「間もなく、マクシミリアン・テルミドールは我々に戻る…それで準備は終わりだ」

side out

カブラカン撃破から約1ヶ月後、首輪付きのもとへ企業連からホワイト・グリント撃破の依頼が来て首輪付きはそれを受託する。

そしてレイジの方にはラインアークから依頼が来て、それを受託した。

「これで、後は計画通りやればいいのか…」

そう言い、依頼の為に準備を始めるのであった

そしてラインアーク防衛戦が始まる。企業連側は、ランク1のステイシスと首輪付きのストレイド2機に対して、ラインアーク側はランク9のホワイト・グリントとネームレス・ワンの2機で応戦する。戦闘は最初から激しかった、そして中盤に差し掛かった頃、最初に落ちたのはネームレス・ワンである。ステイシスのレーザーバズーカER-0705により戦闘不能となり海中に没する。そして次にステイシスは距離をとるためか、OBを使い移動し、それをホワイト・グリント逃がさんとはかり追う。結果ホワイト・グリントの撃った弾丸がステイシスのメインブースターに直撃し水没し、1対1になり、ホワイト・グリントもすでに疲弊しきっているにもかかわらず2機の戦いは凄まじかった、そして最後に勝ったのはストレイドであった。

ラインアークの最も重要な戦力、ホワイト・グリントは失われ、オツダルヴァとジョン・ドウも水中に没する。こうしてラインアーク

クでの戦闘はただ一人のリンクスだけが生き残って終わる。そしてクレイドルは、安定期に入った。誰もがそう考え、企業は来るべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさにこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

ORCAside

「ホワイト・グリントは戦闘不能。ステイシスとネームレス・ワンは海中に没し、オツツダルヴァとジョン・ドウは生死不明、か」

「これはちよつとな」

「ああ、やりすぎだな、メルツェル」

「よく言う、誰が手間を掛けさせたのか」

「すまん、完璧主義者なんだ」

「…まあいい、これでやっと元に戻ったんだ。時期もある、クローズ・プランを開始しよう」

「そのことだが…少しだけ待てないか？」

「パートナー、か」

「ああ、強いだけの阿呆でもないようだ、試す価値ぐらいはあるだろう。」

「状況は既に手遅れだが、同時に緩慢だ。今更焦ることもあるまいよ」

（さて、あの首輪付きは俺たちのところに来るかね…？）

side out

そして数日後、首輪付きのもとへとある依頼が届いたのであった…

第6話（後書き）

このペースで行くと明日にはA C f aの世界が終わり、I Sの世界に突入することができそうです。

なので一生懸命頑張るので、よろしくお願いします。

第7話（前書き）

更新が遅くなってまことに申し訳ありません

リアルの用事がかなり伸びて家に帰ってくるのが遅くなり更新が遅りました。

すいません m (_ _) m

いろいろ独自設定みたいなものを加えたルートとなっております。

そして、一応今回の話でACの世界は終わります。

そして無駄にながいですけどどうぞご覧ください。

第7話

第7話

首輪付きside

首輪付きのもとへ、一件の依頼がくる。依頼人は“ORCA”そして依頼内容は

「初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。

GAのアルテリア施設、ウルナに侵入しすべてのアルテリアを破壊してほしい。

この作戦は、クレイドルの前提を覆す、明確な反逆行為だ。それを理解した上、で私の言葉を聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ：それをよしとしないのであれば、私の依頼を受けてみないか？

勿論、報酬は払おう：期待して待っている。」

との内容のことであった。そして、首輪付きはこの依頼を受けることにした：

そしてアルテリア・ウルナ破壊ミッション、開始。

「ミッション開始、目標は遥か上だ、登っていくぞ…

わかっているな？自分がやろうとしていることの意味が…」

「わかってるよ、セレンさん。今からやろうとしていることによってどうなるかは…」

俺は、今まで他人から言われたままにしか行動しないでいたけど、今回は違う。

確かに扇動されたと言われればそれでおしまいかもしれないけど、俺は今、自分自身で出した“答え”によってここにいるつもりだよ」「そうか…」

セレンはそう呟くと、そこで通信がいったん途切れた。

そしてストレイドは、最短ルートで上昇していき目標までたどり着くと、周りの防衛部隊を壊滅させ、目標を次々と破壊していく、そして最後の1つを

「これが、俺の出した“答え”だ」

そう言うのと、いつもより重く感じる引き金を引いた。

そしてミッション終了後

「君の答えは、見せてもらった、ようこそORCA旅団へ」と連絡が入り、このときをさかいに首輪付きは、ORCA旅団へ加わったのであった

そして首輪付きがアルテリア・ウルナを破壊してから約1週間後
レイジと首輪付き、二人にほぼ同時刻に依頼がはいる

レイジside

「さてクローズ・プランを開始する。ジャック（レイジ）、君にはアルテリア・カーパルスを首輪付きとともに襲撃してもらいたい。」

「首輪付きと一緒にか？別にかまわないが、あいつ一人でも充分だろ、保険だとしても後方で待機していればいいと思うんだがな」

「まだ、完全に彼の力を把握しきれてないからな…」

「ふむ、そういうことにしておこう。それにしても、ずいぶんとあいつのことを気に入っているみたいだな」

「ふっ、まあな…」

「では、俺は行かせてもらおう」

「ああ、最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ、派手にいこう」

side out

首輪付きside

「マクシミリアン・テルミドールだ、クローズ・プランを開始。主要アルテリア施設に対し、ネクストによる同時攻撃をかける。

君のターゲットは、大規模アルテリア施設、カーパルスだ、防衛施設の要、ノブリス・オブリージュをジョン・ドウのファンタズマとともに撃破してくれ。

施設には多数の防衛部隊も展開している、ノブリスの到着前にこれを叩くことができれば、その後の戦闘が幾分か楽になるだろう。

最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ。諸君、派手にいこう」

（ジョン・ドウ？ラインアークのホワイト・グリント撃破のときのやつか…まさか生きてたのか？どちらにせよ今回は味方らしいから、まあいいか）

首輪付きはそう思うと、ミッションの準備をしにかかった

side out

アルテリア・カーパルス襲撃ミッション開始

「ミッション開始、カーパルスを制圧する。

ノブリス・オブリージュが戻る前に、可能な限り防衛設備を破壊しておけ、それだけ楽になるのだからな」

とセレンからの通信が入る

「お前が、噂の首輪付きか。今回のミッションをともにする、ジョン・ドウ、ファンタズマだ。よろしく頼む」

「ああ：なあ、あんたは」とレイジに質問をしようとする

「すまんが、聞きたいことがあるならこのミッションが終わった後にしてくれ」

とレイジの言葉にさえぎられる

そして二人は次々とカーパルスの防衛設備を破壊し、約2分ほどで全て壊滅させる、するとセレンから

「敵ネクスト反応、急速接近。くるぞ！本番だ。敵ネクスト、ノブリス・オブリージュを排除する」

と通信が入る

「ほう、意外と早かったじゃないか。いくぞ首輪付き、まあ見物するならするで構わんがな」

そう言いながらリーダーを確認するレイジ。すると

「空き巣とは、なんとも情けない：匪賊には、誇りもないのか？生き易いものだな、羨ましいよ」

と言いながら、ノブリス・オブリージュがOBで突っ込んでくると右手に持っているMR-R102を撃ってくる

「さあな：たとえあったとしても貴様に教える気は無いがな」

レイジはそう応えながら右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで応戦する

そして首輪付きは、右手の063ANNARと左手の01-HITM

ANでレイジにあたらないようにノブリスを横から撃っていく

「そうか、2対1でいどんでくるとは：さらに情けないな」

「ジェラルド・ジェンドリン、貴様は勘違いしているぞ。これは決闘ではなく戦争だ、戦争に2対1で卑怯などとは言ってられないんだよ。それなのに誇りだのなんだのと言ってたら無様に死ぬだけだ」

「なんだと：？」

「ふむ、いいだろう。貴様が望むように1対1で勝負をしてやろう。まあ、貴様の誇りなんぞ興味無いがな」

「その行動：後悔してもらおう」

「てことで、すまんな首輪付き」

「いや、構わない」

そういうと首輪付きは攻撃をやめ離れる。そして真っ先に動いたのがノブレスである

右手のMR-R102で弾幕を張りながら左背のEC-O307ABを確実に当ててこようとする。だがレイジはそれを、QBを使い難なくよけていき03-MOTORCOBRAと051ANNRで撃ち返し確実にノブリスのAPを削っていく。

「どうした？そんなものか：誇りだのなんだの言っというてその程度とはな、だったらそんなもの（誇り）、狗にでも喰わせておけばいい」

「貴様っ…！」

ジェラルドは珍しく、怒気を含んだ声で言い、左背のEC-O307ABをパージし地面に落とすと、左手のEB-O305でレイジに切りかかる。

が、レイジはそれをあっさりと避け右背のEC-O300でノブリスのコアを確実に撃ち抜く。

「信じられん：ノブリス・オブリージュが、こうまで押さえられんとは…」

そう言い、ノブリス・オブリージュは沈黙した

「ネクスト、ノブリス・オブリージュの撃破を確認」

とセレンから通信が入る。

「身勝手な行為、すまなかったな。首輪付き」

「気にするな、こっちは楽できたと思えばいいさ」

そう会話してると

「やはり敗れたな…ジェラルド・ジェンドリン。貴族の務めなど、大層な御託の割に…クククツ。まあ、俺が尻拭いをしてやるとするか」

と声がする。するとセレンが「増援か、なるほどな。」とどこか納得したように言い

「二機でかかれればよいものを…敵ネクスト、トラセンドだ。これも排除する。」

別行動を後悔させてやれ」と続けて言った。

「了解。じゃあ、さっさと終わらせちまおう」

「了解した」

そう言うとう首輪付きとレイジはトラセンドに向かっていき銃弾の雨をひたすらに浴びせる。トラセンドは必死に振り切ろうとするが全く振り切ることができず一方的にやられた

「フツ：勝って、勝って、最後に負ける運命か…お前らも同じだ。」

それまで、精々浮かれてるがいい…」

そういい残すとトラセンドも沈黙する

「ネクスト、トラセンドの撃破を確認。ミッション完了だ。…クローズ・プランのはじまりか」

と言い、首輪付きだけに

「後悔するなよ、お前の選択だなのだからな」と通信を入れる
「わかってるよ、セレンさん」

こうしてアルテリア・カーパルス襲撃のミッションは完了した

7月、多くにとって突然に、それは起こった。

正体不明の、複数のネクススト機による、アルテリア施設の同時襲撃、その殆どは成功し、クレイドルは、抛って立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“To Nobles Welcome to the Earth”

それは、すべての空に住む人々への、明確な宣戦であった。

企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂気の反動勢力にたいすることを余儀なくされ、

人々は、覚束ない足元にはじめて気付いたかのように、それを恐怖するしかなかった。

ミッション終了後、首輪付きとレイジはとある部屋で話していた

「なあ、あんたは、ラインアークで俺と戦ったやつで間違いないよな？」

「その通りだ」

「なんで、ORCAに入ったんだ？俺みたいにテルミドールに誘われたのか？」

「そうだ、と言っても俺の場合は、ずいぶんと前に企業に殺されそうになってな、瀕死のところをあいずに助けてもらっただけだな」

「企業に殺されそうになって、じゃあ企業に復讐のためにいるのか？」

「違うぞ。まず、俺は復讐なんてものは考えたことがない。俺がここにいるのは企業が支配するこの世界に未来はないと考えるのと、ある意味、贖罪のためだと言ってもいいな」

「贖罪？」

「そうだ、贖罪だ：自分の友を、見殺しにしたとも言えることをしてしまったからな」

「でも、戦場だったなら仕方ないんじゃない？」

「確かに、そう言えば楽かもな：だが、戦場だったからなどと何かを理由にして自分の罪から逃れようとしてはいけない。たとえ自身の罪から目をそらしたところでその罪は消えないんだ。だからこそ自身の罪と向き合い生きてかなければいけない。少なくとも俺はそう思っている：お前も自身の罪から目をそむけないようにな」
そう言うときレイジは部屋を後にした

そして三日後、

レイジのもとへ衛星軌道掃射砲防衛の依頼がはいる

「衛星軌道掃射砲の存在が、企業側に漏れた」

「なるほど、企業連は全力で潰しにかかるだろうな。で、クローズ・プランの要諦である衛星軌道掃射砲を守ればいいんだろう？ 単独でか？ それともパートナーをつけてくれるか？」

「話が早くて助かる、銀翁と共に守ってくれ。そしてすまないが、

銀翁以外に追加の戦力を用意することはできない」

「そうか：ん？ 首輪付きはどうした？」

「彼には、オールドキングを粛清しにいつてもらおう」

「なるほど：やはりオールドキングは、クレイドルを落とそうとするか」

「なんだ、気づいていたのか？」

「まあな、じゃあ、さっそく準備をさせてもらおう。前のミッションで手に入れたものも試してみたいからな」

「そうか、では、頼む」

そして通信が終わるとレイジはネクストのある格納庫へ歩いていった

衛星軌道掃射砲防衛ミッション開始

「この作戦のパートナーは、お前さんか、期待させてもらうぞ。あと私は、アサルト・キャノンを使う、くれぐれも巻き込まれるなよ。君だと手、無事では住まんのだからな」

「了解した。」

レイジはそう短く応えたとOBを使いAF・イクリプスの上に取り付き右手の03—MOTORCOBRAと左手の051ANNRをひたすらに撃つ。

そうすると、あっという間にイクリプスがボロボロになり撃破される。

「アンビエント、目標を確認しました。問題ありません、作戦を開始します」

と言いながら、攻撃してくるネクストを確認する。するとレイジは「っ！」

と、思わず驚きの声をあげようとしてしまう。それもそのはずかもしれない…なんせ、目の前にいるのは昔、自分が助け、髪飾りをプレゼントした少女。そう、リリウムなのである。

レイジはどうしようもなく叫びたかった。なぜ、なぜ、こんな所（戦場）にいるんだ！と、だがここで冷静さを失えば全てが終わってしまうと考え必死に冷静さを取り戻した。

（どうする？どうすれば殺さずにすむ？どうすれば…）

彼は今、自分の中の矛盾に酷く焦っていた。そう例えどんな相手だろうと戦場に生き残るために殺すという考えでいて、今回も心を非情にしてそうしようと思っても、なぜかそれができないのである。もしここで選択を間違えたら取り返しの付かないことになるかと直感的にわかっていた。

（今までさんざん自分に非情になれ。そうやってきたのにな、笑わせるだが：たとえ矛盾で、身勝手な自己満足で他人から偽善者と罵られようといいさ、今回は俺のやりたいようにやるさ）

そう決断すると先ほどまでアンビエントの攻撃をほぼ避けるだけでいたレイジは03－MOTORCORAと051ANNRで応戦しはじめる。

レイジはアンビエントの死角に必死に回り込み腕か足の間接部とコアをあまり大破させないようにメインブースターなどを攻撃していくのだが相手はランクはNo.2である。いくら政治的な理由でNo.2とされたからといって弱いわけではなくしつかりと強いのである。ただ倒すだけであつたら何の問題もないだろうが、今回は殺さないようにとしているのである。

そしてアンビエントとファンタズマが激しい攻防を繰り返していき消耗戦になると思われたが、突如均衡が崩れたのである。

遠距離からネオニダス（銀翁）のネクスト月輪の左腕のプラズマライフルFLUORITEが撃たれリリウムが慌ててそれを回避しようとし隙ができるレイジはその隙を見逃さず左手の051ANNRを捨てて格納されているレーザーブレードEB－0600でアンビエントの片足を確実に焼き切り、バランスを崩したところをすかさず03－MOTORCORAで追い討ちをかけ行動不能状態にする。「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。

すみません、王大人。リリウムはご信頼に背きました」

そういってると突如、弾丸が飛来し、その弾丸は、アサルトキャノンサイレント・アバランチを破壊するために撃った直後でありP

Aが回復しきつてない月輪のコアにあたる

「ぐっ！」

「遠距離射撃…まさかストリクス・クアドロか！銀翁、大丈夫か！」

「ほう、さすがに気づくか。よい勘をしている」

「なんとか、にしても密かに狙撃とはな、実にあの男らしい」

そう言いながら月輪がストリクス・クアドロに近づいていき交戦を始める。すると王小龍は

「リリウム」と呼びかけ言葉を続ける

「貴様は私が貴様に信頼しているのだと思っているが勘違いをするな、私は今まで一度も貴様を信頼だのとは思ったことが無い。それにしても役に立たない駒だったな。ネクスト一機すら落とせずにいるのだからな。まあ貴様の代わりなどいくらでもいるからなもう用は無い、消えろ」

そう言うとりリウムは

「そん、な…」

と今にも消え入りそうな声ので喋る

そして王少龍は動けないアンビエントに対しコアを狙いを定め引き金を引いた

だが弾丸が到着する前にレイジのファンタズマが間に入り盾となる

「下種野郎が…」

レイジはそう言うのと両背のEC-0307ABをストリクス・クアドロに向けて撃つと相手の左腕を吹き飛ばす

そして立て続けに月輪がHLR01-CANOPUSを当てると

「ふむ、やはり私ではこの程度か」

そう言うストリクス・クアドロは撤退していく

「尻尾を巻いて逃げるがよいよ、王小龍。戦場に陰謀家は不似合いだ。

それにしても、どうやらわしもここまでのようだな」

「銀翁、すまない…」

「なに、気にするでない。もともと長くない命だ、なに、作戦は果

たせた悔いはない。君が気負うことではない。この後のことは頼んだぞ？」

「ああ、まかせろ」

「そうか、遂げろよメルツェル。」

そう言うのと銀翁からは通信が一切返ってこなくなった

そしてレイジはアンビエントに近づきファンタズマを降りコクピットのハッチを外部のスイッチで強制的にあける。すると中にいたリウムはレイジのことを見ると

「あなたは：レイジ、さん？よかった、また、会うことが、できた：」

そう言うとりリウムは気を失う。するとレイジはリリウムを自分のネクストに乗せ帰還した。

そして衛星軌道掃射砲防衛の作戦の翌日

「作戦の翌日ですまないが、さっそくミッションの説明をさせてもらう。

ミッション内容はインテリオル・オーメルの最新型AF・アンサラを撃破してくれ」

「あの、最新コジマ技術の塊か」

「ああ、他のAFと比べても、圧倒的な戦闘力を持っている」

「だが、それを制すれば、一気に最終段階、だろ？」

「その通りだ、そしてメルツェルの予想だと相手はこれにさらに追加の戦力、恐らくネクストあたりを入れてくると思っているらしい」

「アンサラーともにか？」

「ああ、どうやら使い捨てをするつもりようだ」

「なるほどな、いかにも企業連らしいな」

「確かに、そしてこのミッションの開始は6時間後だ、頼んだ」
「わかった」

そう言いレイジは自分の部屋にいったん戻った

リリウムside

「ここは…」

リリウムは目を覚ますと目の前には白い天井がある。

そして上半身を起こし周りを見てみるとリリウムには見覚えが無い部屋だった。

そしてリリウムは、起こった出来事を思い出そうとしていった。

（そう、私は王大人に捨てられたのでしたね：でも最後に気を失う寸前にレイジさんが助けに来てくれたような気がします。たとえば夢だったとしてもまた会えて嬉しかったです）

そう思うと。リリウムは急に涙を流し始める。

すると、扉が開き部屋に誰かが入ってきた。そして

「どうした、泣いているのか？ なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言ってくる人を見ると、その人はレイジだった

side out

レイジはテルミドールからミッション内容を聞くとリリウムを寝かせている部屋にいき、そしてドアを開けるとリリウムは泣いていた
「どうした、泣いているのか？ なにか怖い夢でもみたのか？」
そう言うとりリウムはこちらを向き

「レイジ、さん？」と言う

「ああ、久しぶりだな、リリウム」

レイジはそう言いリリウムの頭を撫でる。するとリリウムは「会いたかった、ずっと、ずっと会いたかったです…！」
そう言うとりリウムはレイジに抱きつき涙を流す。そしてレイジは泣いている妹を落ち着かせるかのようにして頭を優しくそっと撫でるのであった。

そしてリリウムが落ち着くと、二人は今までのことを話していた。レイジはリンクス戦争のあと自分がどうなり、どうしてORCAに入ったのかを、そしてリリウムのほうもウォルコット家に迎え入れられてからんどうを、そしてあつという間に時間がすぎ、ミッシヨンの時間が迫る

「レイジさんは、だからORCAに入ったのですか…」

「ああ、他人からみたら笑える話だろ？」

「そんなことないです！少なくとも私はそうは思いません！」
リリウムはそう力強く言う

「そう言ってくれるか、ありがとう」

そう言い微笑みながらリリウムの頭を撫でとりリウムは少しうつむき頬を赤らめる

するとpipipiと携帯端末から電子音がし、見てみるとミッシヨン開始の2時間半前であることをアラームが知らせてくれた。

「悪いが、今からミッシヨンなのでな私は行くとするか」

そう言い椅子から立つとりリウムが袖をつかむ

「さっきも言ったが、ミッシヨンには連れて行けないぞ」

「大丈夫です。だから考えました、私をオペレータとしてください
！」

「オペレータはいなくても大丈夫なんだがな…」

「いえ、今回のミッシヨンはとても危険なんですよね？でしたらリリウムが引き受けます！」

「だが、オペレーターの知識は」と言おうとしたところをさえぎられ
「いえ、ウォルコット家の教育の中にオペレーターとしての教育も
あったので、完璧にすせてあります」と言う

それを聞きレイジは自分のこめかみを軽く押さえ考え込む。すると
リリウムが

「私は、不安なんです。もしかしたらレイジさんがまた急にどこか
遠くへ行ってしまうのではないかと…」そう静かに言う。それをレ
イジは見て

「わかった、よろしく頼む」

「はい!」とリリウムは力強く返事をした

そしてAF・アンサラー撃破ミッション開始

「ミッション開始です。AF・アンサラーを撃破してください」

「了解。さてあれをどうするか…」

「そうですね…もしかすると、あれほど巨大なものを浮かしている
ということは、無理をして浮かしているかもしれません。どこでも
構わないので外装を破壊していただくさい。そうすれば何れもた
なくなり、崩壊するはずです」

「わかった、助かる」

そうレイジは、言うどアンサラーに近づいていき外装部分を左腕の
“07-MOONLIGHT”で切り落としていく。そう、この
“07-MOONLIGHT”は先日ミッションから帰還後に真改か
ら、ずいぶんと昔、アンジェが死ぬ前にレイジに渡すように伝えら
れてたらしく左腕の“07-MOONLIGHT”を受け取ったのだ
「まず一枚目」

そういいながら次の外装部分を破壊していく、すると

「作戦エリア全域に高濃度コジマ粒子確認！これではP Aがやくにたちません、こちらだけP A無しと言うことになります。それにしてもこのあたりは閉鎖空間ではないはいんですよ！企業はこの地上をどうするつもりなんでしょうか…」

「さあな、それを考えるのは後にしよう」

そう言っているあいだも無数のミサイルがまた襲ってくる

（やはり、このミサイルの発射口から潰していくか）

そう考えるとレイジはミサイルの発射口を潰しにかかる。そして天辺の発射口を潰しにかかる

「中心に大規模コジマ収縮、離れてください！消し飛ばされてしまいます！」

トリリウムが焦りながら言うレイジは急いで退避し直撃はしなかったものの少しくらってしまふ。そこに追い討ちをかけるかのごとく無数のミサイルが来る。それをなんとかQ Bを使い避けようとするがいくつか当たってしまう。

「A P 40%減少！」

その言葉を聞き必死に発射口を潰す。

（これでミサイルの発射口はすべて潰した、次だ！）

そう思い次々に外装を破壊していく

「アンサラー、そろそろ限界です。アンサラー落ちます、巻き込まれないでください」

そういいQ Bを使いその場を離れるレイジ

「アンサラーの大破を確認しました。…っ！そちらに高速で何か接近してきます！これは…プロトタイプネクスト！どうしてそこに！？」

（やはり、O R C Aだけではなく企業側ももっていいいたか）

「おそらく企業のだろう、そいつも破壊する」

「無茶です！すでにA Pが半分をきっています、撤退してください！」

「心配するなりリウム、俺を信じろ」

「わかりました：必ず、必ず帰ってきてください」

「ああ」

レイジはそう言うのとプロトタイプネクスト、00-ARETHAアレサに向かつていく

プロトタイプネクストはレイジの乗るファンタズマを確認すると右腕のガトリングでうってくる

それをなんとかかわしながら右手の03-MOTORCOBRAで撃ちながらどうにか隙をついて左の07-MONLIGHTで切り刻むがプロトタイプネクストはまるで消えたかのような速さのQBを使われせいぜいかすらせることしかできない、そしてガトリングによりどんどんボロボロになるファンタズマ

（もう限界が近いか：だが確かやつは、コジマキャノンを使う前に動きを止めるはず、そこにかける！）

そう思い必死に避けるレイジ、そしてついにプロトタイプネクストは動きをとめコジマキャノンを使うとする。するとレイジはプロトタイプネクストに対して突っ込み左手の07-MONLIGHTで切りかかる、するとプロトタイプ・ネクストはコジマキャノンを発射する。だが直撃はせず、ファンタズマの右腕と右背のEC-0307ABが吹き飛ぶ。だがレイジはそれでもとまらずに左手の07-MONLIGHTを振るうとプロトタイプネクストのコアを完璧に焼き切った。するとプロトタイプネクストはコジマ粒子を漏らしながら爆発していった。すると

「レイジさん！大丈夫ですか！？レイジさん！」

リリウムが泣きそうな声で通信をしてくる

「ああ、なんとか、終わ、った：そして、すま、ない

俺は、もう、駄目、みたい、だ・・・」

「そんなことっ、そんなこと言わないでください！」

通信越しに必死に叫ぶリリウム

「いや、いい、んだ、最後、に、お願い、が、あるん、だが」

「大丈夫、です。なんでも言ってください」と泣きながら答える

「俺、の、死を、気負、わないで、くれ、そして、つよく、生きて、くれ…」

（テルミドール、先に逝って待ってる、首輪付き、成し遂げろよ…

そして、ベルリオーズにアンジエ、今、そっちに逝くよ…）

その言葉を最後にレイジからは一切、返答が返ってこなくなった…

第7話（後書き）

前回の話みたいに結構無理やりなところがありますがそこら辺はできればスルーの形でお願いいたします（汗）

なんはともあれこれでISの世界に飛び立つことになります。
そしてアンケートの結果ですが

首輪付きもISの世界に突っ込むことになりました

アンケートにご協力してくださった方本当にありがとうございます。

ぜひ、これからもよろしくお願いします。 m (_ _) m

第8話（前書き）

はい、前回A Cの世界で死んだので
今回からI Sの世界にきましたけどまだI S本編にはなりません
本当に申し訳ない。

次からはだんだんとI Sに関わるようになっていきますので、
よろしく願います。

第8話

第8話　　＼真・プロローグ的な＼

冷たい雨が降っているなか、とある少年が目を覚ます。

「ここは…」

そう言いあたりを見回すとどうやらどこかの路地裏みたいだ。

「なんで、こんなところに…俺は死んだんじゃないかったか？」

そうぼそりと呟くと、はっと気づいたかのように自分の体をみると驚きの声が隠せなかった。

「なん、だと…？」

それも、そのはず。彼の体は5歳ぐらいの少年になっていた。

（あれか？コジマの力か？それともスタンドの能力か？もしかして某少年探偵コ○ンの黒づくめのあの薬か？）

そう冗談まじりに思いながら自分の服装を確認する。

彼の服装は、ボロボロの長ズボンに、長袖か、そしてこのでかいマントのようなボロボロの布切れである。

そしてその服装から自分がどのような状況かを推察してみることにした。

（おそらく、また別の世界に来てしまったのか？そしてあれか、この世界では親に捨てられたかなんかか？それとも誘拐事件などに巻き込まれたか？まあとりあえず人通りのあるところにでてみるか）
そう思い、めんどくさそうに片手を首に軽く当てると手に違和感を感じ慌ててもう一度手で触り確認する、しかし触れば割るほどとも覚えのあるものだった。

「まさか、AMSか？鏡を使って見ないことにはなんともいえないが、おそらくそうだろうな」

そう愚痴りながらも人通りのあるほうへ歩いていき、路地裏をぬけ

ると目の前の光景に少し驚く。

「まさか、俺は戻ってこれたのか？」

そう、目の前には少し変わっているが自分はずいぶん前に、日常的に見ていた日本の光景であるからだ。

「あたりに所々置いてある店の看板も日本語だ」

そう言いながら突っ立ていると行き交う人々からかく視線を感じると自分の姿がのことふと思ひ出す。すると慌ててその場から離れるためにどこかに走っていき、ある程度離れると止まり、辺りを見渡す。どうやらいつの間にか人通りの少ないところに来てしまっているようであった。すると体の力が急に抜け倒れてしまう。

「あれ？力が、はいんない…？」

そう、さっきまでは無我夢中で動いていたが、この体はおながが極限にまで減っており、栄養不足とも言わんばかりの状態であった。

「これって、まずいんじゃないか？はあ：転生そうそういきなりこれとは、運が無いなまったく…」

そう言いただボーっと何も無いような景色を見ていた。すると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と言い慌てて駆け寄ってくる女性。すると男性が近づいてきて

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

そう言う孝弘と呼ばれる男性はレイジを車に乗せ移動していった。

とある男性 side

僕は三嶋 孝弘といい、とある町の小さな病院の院長だ。

今日は、病院の皆が、娘の由利香の誕生日だからと言って妻の裕子と共に早く帰るようにと気を使ってくれたから、そのお言葉にあま

えて妻と一緒に帰ることにした。そして帰り道の途中に妻が急に「孝弘さん止まって!」

と言ったので慌ててブレーキをおもいきり踏んだ。すると道の端の方に人のような大きなものがあつた。すると妻は慌てて車を降りて駆け寄っていく。僕も降りようとする

「孝弘さん、子供が倒れてるわ!」

と聞くと僕も急いでその子の近くにいき声をかけた。

「君! 大丈夫か!? 今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ!」

僕はそう言うのと妻と共にその子を車に乗せると病院にむかいアクセルを踏んだ。

side out

「…ここは?」

そう言い目を開けるレイジ

(何度目だろうか? この状態になるのは…)

そう考えると扉の開く音がして白衣姿の男性が入ってくる。そして男性はレイジが目覚ましてるのをみて

「よかった、目を覚ましたんだね」

と安堵の表情で言った。

「あなたが助けてくれたんですか?」

「そうだよ、僕の名前は三嶋 孝弘っていうんだ、この病院の院長をやっているんだよろしく。でも驚いたよ、僕が帰る途中に妻が倒れてる君を見つけたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。あつ、あと俺の名は久瀬 零治です」

「零治君か、よろしく。」

そう微笑みながら言う

「あと、起きたばかりで悪いけど質問をしてもいいかな？」

と少し真面目な表情になる孝弘。

「ええ、大丈夫です」

と零治が言う

「まず君の親御さんはどうしているかわかるかい？」

「いえ…わかりません」

「そうか…次に、なぜあんなところに倒れていたんだい？」

「気づいたら、路地裏にいてそこから途方もなく歩いていたら、急に体に力が入らなくなって」

「てことは、その路地裏にいた前の記憶はないということかな？」

（やってしまったな、名前はおぼえてるのにそれ以外が都合よくぬけているとなると、あやしまれるだろうな、さてどうする…）

そう自分のミスをどうフォローしようか必死に考えていると孝弘は「ふむ、過去の出来事はとても思い出したくなくて自分の名前以外を思い出さないようにしているのか？それとも…」

などと、ぶつぶつと独り言のように喋っていき

「多分、君は本能的に嫌なことを思い出さないようにしているんだろうな」

と零治の状態を告げたのであった

（まさか、納得したのか？まあ何も追求されずにすむならそれでいいが…）

と思っていると

「最後に1つだけいいかな？」

「はい…」

「首のところに埋まっている機械は、なにかな？」

そう言われると零治は一番聞かれたくないことを聞かれて一瞬、とても驚くがすぐさま冷静に落ち着き

「首…？」

と知らなかったかのように言い、自分の首を触りまるで初めて気づいたかのように演じた。それを孝弘はみて

「どうやら知らなかったようだね、すまない。もしかしたら君はそのことが嫌で記憶を閉ざしたかもしれないのに」

と申し訳なさそうに言う。

「いえ、驚きましたけど記憶が無くてなんとも感じないので大丈夫です」

「そうか、ありがとう。で、今の君にこんなことを言うのもあれだが：さっき警察の知り合いに聞いたんだが、どうやら最近は誰の捜索願いも出されて無いらしくてな：」

となんとか濁そうとしているが

「要するに、俺は捨てられたんですね？」

そう聞くと孝弘は

「すまない：」

と言い頭を下げる

「孝弘さんが謝る必要はないですよ。俺もなんとなく気づいていましたし、親の顔も思い出せませんから」

「そうか：なあ、急に言うのもなんだが、もしよかったら僕の養子にならないか？」

と突然の申し出に驚く

「いいんですか？俺みたいなものを養子になんてして」

「もちろん構わないさ。まあ、君が嫌でなければの話だけど」

「じゃあ、ぜひよろしくお願いします」

「そうか、じゃあさっそく色々としなきゃいけないね。あと一応今日で退院できるけど明日までいるかい？それとも今日からうちに来るかい？」

（ふむ、AMSのこともあるからな：もしこの人しか知らないなら他の職員の目にふれる前にいったほうがいいな）

「はい、じゃあよろしくお願いします」

「わかった、じゃあ準備が終わったらよびにくるよ」

そういう孝弘は部屋を出ていった

孝弘 side

僕は零治君の病室をでると妻が待っていてくれた。

「孝弘さん、あの子どうだった？」

と心配そうに聞いてくる

「ああ、零治君は目を覚まして元気だったよ。しかも養子にもなるって」

そう言うとき妻はほっとし、喜んでいた

「でも、首の機械のことは知ってみたいだったよ。そのことを聞くとほんの一瞬だけど動揺していたしね。どうやら彼は記憶を閉ざしてるんではなくて話したくないみたいだ。まあ、それもそうだと思うよ。推測だが首にあんなものを埋められたんだ、きつととても酷いことをされたんだろうね。」

僕がそう話すと妻の表情は暗くなる

「私たちじゃ、あの首の機械をとってあげることはできないのよね……」

「ああ、あそこまで脊髄に近いとね、悔しいけど今の医療技術じゃ絶対に無理だろうね、正直どうやったらあんなことができるか知りたいぐらいだよ。まあなんにせよ、あんな子供にあれほどの非人道てきなことをするなんて許せない」

僕はそういつてるといつの間にか爪が食い込むまでこぶしを握っていたらしく手から血が流れでる。そうすると妻は僕の手をそっと握り「大丈夫ですよ。孝弘さんたとえ今、あの機械をとってあげられなくてもあの子に人並みの幸せを与えてあげることができるはずだから」

「ああ、そうだね」
と静かにうなずいた

「それにしても由利香をずっと待たせてしまってるがどうしよう…」
「それなら大丈夫ですよ。さっき由利香に電話をしておきました。
ついでにもしかしたら家族が増えるかもしれないと言ってあげたら、
電話口ですごいはいはいでしたよ」

「それはよかった。君は零治君が断わらないとわかってたのかい？」
「ええ、それは一児の子を持つ母親の勘です！」

そう自信満々に言う妻を見て思わず笑みがこぼれた

「さて僕は、色々と手続きをしにいくよ」

そう言うと言僕は廊下を歩いていった

side out

零治と孝弘の会話から数時間後、零治は孝弘とその妻、裕子とともに三島家に向かっていた

そして、三島家の前にきて孝弘が家の扉をあけ

「ただいまー」

と言うと奥のほうから足音が近づいてきて

「おかえりー！わたし、いい子にしてみましたよ！」

と元気よく走ってきた女の子を孝弘さんが

「えらいぞ、由利香！」

と言いながら頭を撫でる。どうやら女の子の名前は由利香というらしい。

「ほら、由利香。電話で言ってた新しく家族になる零治君よ。ちなみに由利香より1つ年上だからお兄さんね」

そう言い、裕子は零治を自分の娘に紹介する。

「わたしの名前は、由利香っていいですよ！」と元気よく挨拶をしてくる

「俺の名は、零治という。よろすしく」

「うん！よろしくね、れいじお兄ちゃん！」

と言うと勢いよく零治に抱きついてくる。それに対し零治は少し照れくさそうにする。

そんなやり取りを孝弘と裕子の2人はみて微笑んでいる。

そして零治もこれからこの温かい家庭がずっと続くと思っていた…
そう、あの事件が起こるまでは…

第8話（後書き）

いろいろとありえねえと思われますがそこら辺はどうか都合主義で通してください。

お願いします。

そして首輪付きやリリウムが入ってくるのはもう少し先になるかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年11月27日19時56分発行